福崎町文化

第27号　平成23年3月31日　兵庫県神崎郡福崎町福田176の1　福崎町文化センター発行

『北野神楽』

柳田國男五〇年祭を前に

東京学芸大学　石井正己

一

柳田國男は、昭和三十七年（一九六二）八月八日に数え八十八歳で亡くなった。今年の命日が来ると、満四十九年を迎える。半世紀と言うには早いものの、今年は五〇回忌という節目の年に当たることになる。

福崎では、昭和十六年（一九四一）八月十五日に亡くなった兄の井上通泰とともに、二人の遺徳を偲んで、毎年八月に山桃忌を行ってきた。生家での講演会、記念館での短歌祭を重ねてきたことは周知の通りである。私も十四年前、筑摩書房から『柳田國男全集』を発刊する直前の夏、「柳田國男の葉書」についてお話ししたことがある。

すでに話題に上っていると思われるが、今年の八月六日・七日の両日、町制五十五周年記念事業として、「柳田國男五〇年祭・第三十二回山桃忌」が実施されることになった。全国に先駆けてこうした事業が実現できるのは、長年にわたって山桃忌を継続してきたからにほかならない。町を挙げた取り組みがこうした継続の中から生まれてくるのはすばらしい。

六日は、山桃忌の追悼儀式の後、「柳田國男の原点・福崎」の基調講演、「今、柳田國男を考える」（仮題）の記念講演、「21世紀と柳田國男」をテーマにしたシンポジウム、そして夕食交流会が開かれる。七日は、午前中に「柳田國男ゆかりの地を歩く」のフィールドワークで辻川界隈を探索し、午後は「柳田國男と辻川」の演劇が行われる。

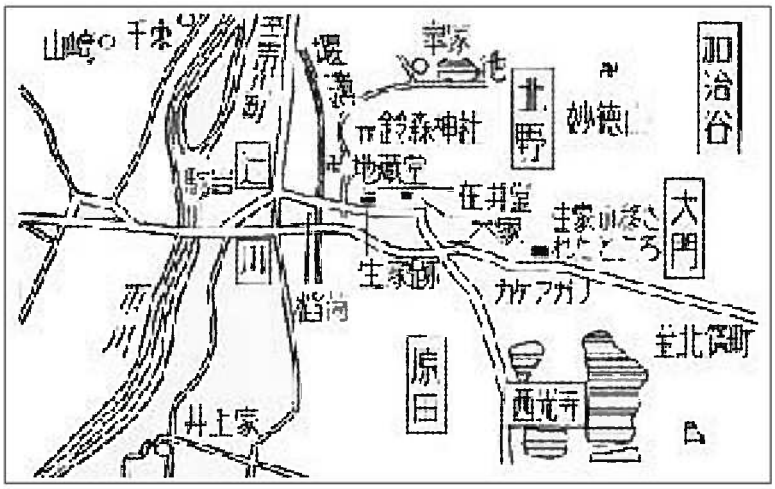
この事業を進めるにあたって、柳田ゆかりの機関や団体がずいぶん後援してくださることになったのはまことに心強い。そうした人々からは、「生地にふさわしい記念事業ですね」とも、「福崎から発信するのが一番いい」という声も聞く。お盆前の暑い時期になるが、国内はもとより海外からも、「この機会にぜひ福崎を訪ねたい」という希望が来ている。

二

柳田は明治八年（一八七五）七月三十一日に生まれ、北条に移転していた時期もあるが、大庄屋・三木家に預けられたため、数え十三歳で茨城県に移り住むまでほとんどを辻川で暮らしている。ずいぶん長命でもあったので、人生の出発点にすぎなかったということにもできるが、柳田の場合、心の故郷として福崎を慕いつづけたことは特筆に値する。

柳田に限らず、人はだれでも生まれ故郷を持っていて、その環境から自由になれない。かつてはそこで一生を終える人が多かったが、明治以降は社会の構造が変わり、故郷を離れて暮らす人がずいぶん増えた。都会が故郷を離れた人々によって形成されたことは、早く柳田の説くところであった。柳田自身は家庭の事情で兄のもとに引き取られ、その後、目を見張るようなエリートコースを歩んだことは繰り返すまでもない。

柳田の著作をいくつかでも読んだことのある人ならば、事あるごとに故郷・福崎の生活経験を引き合いに出すことはすぐに気がつく。これほど故郷のことを話題にしたがる人はめったにいないだろう。しかも、単におしゃべりだというだけでなく、柳田の学問の出発点が故郷にあることは間違いない。そうだとすれば、福崎は、柳田という人間を知り、そこから未来を考えるための大切な場所であることになる。



辻川周辺の地図（以下『故郷七十年』より）

柳田は日本人の歴史を構想するにあたって、常に故郷に基軸を置いていたようである。例えば、昭和三十六年（一九六一）の『海上の道』に収録された「人とズズダマ」という文章で、ズズダマと呼ぶ植物に触れる。四、五歳から、田のへりに自生するズズダマを採り、糸に通して首に掛けて遊んだという。九歳の年には、顔から手足にできた疣を取るために飲んだ？苡仁（ヨクイニン）という薬は、ズズダマの皮から取ったものだと聞かされる。

ズズダマは古名をツシタマと言い、沖縄・奄美諸島の歌謡集『おもろ草紙』のツシヤと関係するもので、宝貝に代わるものとして北へ移植されたのではないかと考えてゆく。小さな植物の実から、海上の道を伝って移動した日本人の歴史を構想するのである。こうした思考を育んだ出発点が、他ならぬ故郷・福崎にあったことになる。

三

柳田は民俗学を確立するにあたって、自分の経験をとても大切にした。豊かな感受性を持った腕白な少年が周囲の自然や人間と触れ合い、やがて大人になってその意味を問い直すのである。それは客観的なデータを集めて、論文をまとめてゆくような方法とはずいぶん違う。論文ならば普通は言わないような個人的体験を手放すことがなかったのである。

柳田國男（明治21年）

実際、柳田は晩年、自分の前半生をだれかに語りたくて仕方がなかったようである。昭和三十四年（一九五九）の『故郷七十年』は、『神戸新聞』に二〇〇回にわたって連載された談話筆記であった。そこには、幼い日の経験と周りで起こった動向が鮮明に語られている。それは柳田の目がとらえた一三〇年ほど前の福崎の姿であった。

そこで語られる話は、決して楽しい話題ばかりではなかった。長兄が嫁を貰うが、二夫婦が住むには小さい家で、嫁姑の争いが絶えなかった。その結果、兄嫁は実家に帰り、兄はやけ酒を飲むようになった。その後、兄は医者となって再生するが、これは、幼い柳田にとって忘れがたい事件であった。今も福崎に残る生家を「日本一小さい家」と呼ぶが、それは客観的判断というより、柳田の経験と強く結びついているのである。

カケアガリに移されていた生家

また、北条にいた明治十八年（一八八五）に経験した飢饉にも触れる。有力な商家が焚き出しをして、食糧のない人がお粥を貰いに行き、柳田自身も毎日お粥を食べさせられたという。兄の悲劇もそうだが、こうした惨事の経験が民俗学の進む動機になったのである。民俗学は家族や社会を幸せにするための学問として生まれたのであり、柳田はそうした思いを生涯手放すことはなかった。

柳田は、物事を考えるにあたって常に故郷・福崎を定点観測の場所にしていたことがわかる。一度でも故郷を離れたことのある人ならば、短い間にも長い間にも、どんどん変わってゆくことを実感した人は多いだろう。柳田も帰郷するたびに、幼い日の生活が消失し、町が美しく変わってゆく姿を目の当たりにしたはずである。柳田にとって故郷は、懐旧の念を催す以上に、実践的な思考を促す場所だったのである。

四

この三月十一日、東北関東大震災が発生し、その後起こった大津波は集落を飲み込んだ。死者と行方不明はそれぞれ一万人を超え、避難者は一八万人を数えるばかりでなく、福島原発で事故が起こり、放射性物質の拡散による環境汚染が心配される状況にある。復興の兆しがなかなか見えない中で、今、多くの人が不安を抱えながら生活している。